

---

雪

千賀藤兵衛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪

### 【Nコード】

N7251X

### 【作者名】

千賀藤兵衛

### 【あらすじ】

大学に入学したおれが知り合った女子学生は、やけをものをよく映す目をしていた。あるささいな事件をきっかけに彼女の中に雪が降り出すまでは。

人間の目のつくりは、煎じつめればカメラである。レンズと絞りがあつて、像を映すための壁面があつて、それだけだ。よくできた装置ではあるが、物理に照らして何ら不思議なところはない。いわんや魂が宿っているわけではない。

春、おれは北海道から南下して、東北地方のある大学に入学した。最初の授業のある日、町は桜が五分咲きで、キャンパスは明るかった。大学生活の幕明けは必修の英語。おれは定刻二分まえに教室に入り、空いている席をさがした。たいして広くもない教室にはすでに数十人の学生が集まつており、満員に近かった。日本の名作文学を英語で読むとかいう面妖な講義なのだが、みなさんずいぶん気合いが入つていらつしやる。

おれは窓際のカーテンの陰の席が空いているのを見つけ、そこへ向かった。二つの机がくつつけてあつて、右側には先客がいる。おれは礼儀上その女子学生に尋ねた。ここ、空いてますか。その学生は顔を上げておれを見た。きれいな目だった。

妙な言いかたになるが、それはものをよく映す目だ。ほかの人とは反射係数が違つかもしれない。眼鏡はしておらず、ぱつちりと開いたその様子は顔面に鏡を二枚嵌め込んだかのようにだった。左右の目のそれぞれにおれがあり、その二人のおれの後ろに窓があり、その窓の向こうに桜の木があつて、折からの風に花びらがふるえている。その人の目の中におれはそこまで見ることができた。

空いてますよ、とその人は言った。

その人は名を中島はるみと言い、東京都から北上してこの大学に来たのだった。同じ講義をいくつか取つていたこともあつて、中島とおれはだんだん親しくなった。しまいにはまわりの連中は二人が恋愛関係にあるものと思うようになったが、それでは当事者はどう

思っていたかというところ、これがどうもはつきりしなかった。たしかに二人で一緒にいる時間はかなり多かったが、いまだきキスどころか手をつないだこともないので恋人どうしと言えるかどうか。

おれにはもちろん人並みの欲があったが、人並みの勘もある。あるとき中島のアパートに遊びに行くと、中島が中学校の卒業アルバムを出して見せてくれた。そして二人でそれを眺めるうちに、おれは何かを感じたのだ。その何かは、アルバムのページをめくる中島の手の動きや写真の説明をする声の中に、ときどき、ごくかすかに匂い立つのだった。そんなとき、中島の目におれはほとんど映っておらず、映っているのは写真の中の遠い日の中島と遠い日の誰かの姿なのだった。おれはひそかに咳払いをして、言う。楽しかったんだな、中学校。ぱちりとまばたきして、中島はおれを見た。その目の中からおれがなんでもないうような顔をしておれを見つめてくる。中島は答えた。……うん。おれは問い詰めたりしなかった。

恋愛未満げっこう。おれはそう割り切って、しよっちゅう中島といつしよに過ごした。まるで仲の良い恋人どうしのように。いつしよに講義に出てほかの連中から冷やかされた。いつしよに映画に行った。いつしよに買物をし、いつしよに飯を食った。いつしよに試験勉強をし、おれだけ追試を受けた。

秋が来て、後期の講義がはじまった。おれと中島の間は相変わらずで、悪友どもはその進展のなさにやきもきしているようだった。後期がはじまるにあたって、連中はおれにさかんにハツパをかけた。なんでも、二人の仲を深めるチャンスは秋から冬にかけてなのだそうだ。寒くなるとくつつきたくなるという理屈らしい。

だが、おれは連中の煽動に対してもっぱら生返事をもって報いた。正直なはなし、おれはいまの中島とくつついたところで体や心があたたかくなるとは思えなかったのだ。講義のはじまる何日かまえ、中島がおれの部屋に遊びに来ていたときのことだった。中島の携帯電話がいきなり五六年まえの流行歌を歌いだし、それを聞くや中島

は見たこともないほど緊張した顔でボタンを押して通話口に話しかけたのだ。ひさしぶりだね、金子くん。あたしのケイタイに掛けてきたのって初めてじゃない？

数分間中島は電話に向かつて懸命に相槌を打ちつづけた。来年の正月に地元で成人式があり、それに合わせてクラス会が開かれることになったらしい。やがて電話は切れ、少しのあいだ中島は携帯電話を握りしめたまま放心していた。おれはあたりさわりのないことを言おうと決心し、そのとおりにした。成人か。これでようやく酒が飲めるようになるんだな。中島はおれを見て、困ったような笑顔をつくった。世間の大多数と同様、中島もおれも満二十歳になるはるか以前にアルコールに親しんでいた。

くつつくこともなく冬が来て冬休みになり、中島は南へおれは北へ、それぞれの国もとに戻って年末年始を過ごした。冬休みはまたたくまに終わり、大学に戻って来て本年最初の講義、金曜一コマの中国語の定刻三分まえ。年始定例の挨拶の飛び交う教室の中、おれはいつもの窓際最前列にすわって外の景色を眺めるともなく眺めていた。さむざむとした冬の、だが雪のかけらもないキャンパスを、学生たちが足早に往き来している。面白みのとぼしい風景だ。そうしてぼんやりしているおれの背中に、おはようという聞き慣れた声がかけられた。おれは返事しながら振り向いた。

二週間ぶりの中島がおれの右隣の席に腰を下ろしたところだった。おれは聞いた。どうだった、成人式は。中島は答えた。振袖着て、どこかの偉い人の退屈な挨拶を聞かされて、ほしくもない記念品をもらったの。振袖の写真あとで見せてあげる。

それは見たかったし焼き増しをたのみたいぐらいだったが、それよりもおれは気になっていたことがあった。そして、そのことを尋ねる勇氣はなかった。クラス会はどうだったか、憧れの彼氏との再会はどんなあんばいだったか、そんなことを聞くのは不躰というものだ。

おれが黙っていると、中島はふいにこちらを向いた。おれを見たのではなく、おれの後ろの冬景色に目を遊ばせている。おれはなにげなくその目を見た。相変わらず映りのよいその目の中には冴えない表情をしたおれがいて、その後ろに窓枠、そしてそのむこうには冬の重苦しい曇り空が見え、そこをはらはらと舞う白いものがひとつあった。雪だ。そのただひとひらの雪はゆつくりと降ってきて、おれの肩にふわりと落ちた……。おれは自分の目を、中島の目から引っぱずして自分の肩をかえりみた。雪などない。窓はどれも閉まっております、教室の中に雪が降るはずがなかった。気のせいかな。

講師が教室に入ってきて、おれの釈然としない物思いはうやむやになった。いつもの睡魔との闘いがはじまった。

そのあと何日か、おれは中島の顔を見なかった。おたがい野暮用が重なっていたからだ。メールのやりとりは何度かしたが、何ということもないふつうの内容のものにすぎなかった。

その日の夕方、面倒なレポートをようやく片付けて、おれはふと中島に会いたくなった。そういえば振袖の写真もまだ見せてもらっていない。メールを送ってみたらすぐ返事が来た。むこうもゼミでの発表を終えてひと息ついたところだという。メールを追いかけると、本人もやってきた。わが四畳半一間の掃き溜めに上がった中島は鞆をそこらへんに置いて炬燵に手と足をつっこみ、おれは中島の用のカップにインスタントコーヒーを溶いて出した。中島は、ありがと、と言っておれを見上げた。その目の中には例によっておれがおり、おれの後ろにはうすよごれた壁と天井があり、そして部屋中に雪が降っていた。

おれはぎよつとして後ずさった。もちろん現実のおれの部屋には雪など降っていないかった。いくら安普請だからといって部屋の中に雪が降ってたまるか。まして今は外も雪ではない。だが中島の目の中で、室内にはこんこんと雪が降り、部屋じゅうのものとおれの上に降りつもりつつあった。と、その目が閉じ、中島の顔が下を向い

た。小さな声で言う。雪が降ってる？

おれが言葉を見つけられずにいると、中島はひとり先をつづけた。金子くんがね、中学校のころにあたしのことを好きだったって言ったの。こないだクラス会で会ったときのことね。おれは緊張のかたまりになって、中島の淡々とした語りくちに耳をかたむける。うつむいた中島の表情はごく静かで、だがそれで安心できるほどおれもまぬけではなかった。中島は語りつづける。でもね、金子くんはいまはもう違うの。今年の春に結婚する予定だって言うのよ。あたしはおめでとうお幸せにって言った。だってほかにどうしようもないもの。もちろんあたしの気持ちをつたえたりもしなかった。それだけ。

中島は目をつむったままコーヒを啜った。それだけと言われても、まだ話が終わっていないような気がしておれはすっきりしなかった。しばらく待ってから、とうとう尋ねた。それで、その……雪は？ 中島は答える。そのときからあたしの中には雪が降り出したの。最初はときたま細かいのがちらちら舞っただけだったけど、だんだん強くなって、いまはこう。それでね、あたしの中にだんだん積もっていった、最後にはあたしは頭まで雪で埋まっちゃうの。

このとき、ふしぎとおれは中島のことを気味悪いと思わなかった。それどころかその逆で、中島がいとおしくてたまらなかった。そして、そのためにかえっておれは冷静で洒脱なふうをよそおってしまったのだ。それはそれは、そんなに雪が降るなんて、地球温暖化のこんにちではめずらしいことですな。

なぜおれはあんなふうに茶化してしまったのだろう。言うべきことがあったはずで、それを直截な言いかたでも遠まわしな言いかたでも、とにかく言えばよかったのだ。それに、言いたくてしかたなかったのだ。

けれどもおれはそれを言わず、かわりに愚にもつかないことを言ったのだった。中島はお義理のようにくすりと笑った。そうね、あたしの中にたくさん雪が積もれば、温暖化による海水面の上昇を抑

えることができるかもしれないね。

再びおれを見上げたその目に、雪は依然として降りしきっていた。やがて後期の終わりが近づいた。この時期には無数の試験やレポートが殺到し、われわれ学生はひとり残らず阿鼻叫喚の野を這いずらねばならない。おれは人一倍這いずっていた。

翌日に英語のレポート締切と数理学の試験を控えたその日、おれはふいに気づいた。ここ一週間ぐらい中島の顔を見ていない。そればかりか、中島の目の中に大雪が降っているのを見たあの夕方からもうだいたいたつのに、その間まともに話をしたこともなかった。これは異例のことだった。前期の暮れには来る日も来る日も二人でいっしょに試験勉強やレポート作成にいそしんだものではなかったか。もちろんこのたびの疎遠ぶりには理由がある。おれはあの日、雪のことを打ち明けられながらいいかげんなことを言って逃げた。そのことが心にひっかかっているからつい中島を避けてしまっただ。意を決しておれはメールを出した。いまどこ？ 返事が来た。図書館で勉強中。おれがいまいる場所も図書館である。好都合だった。席を立った。時刻は午後四時すこし過ぎ。窓の外はもう薄暗くなつて街灯がともっており、雪がちらほら降っているのがよく見えた。閲覧席の間をぶらぶら歩くと、ほどなく見慣れた後ろ姿が窓際の机に向かってるのが見つかった。よう。おれはそれだけ言った。ひさしぶりとかごぶさたとかは絶対に言うものかと思った。中島は顔を上げて言った。

「ひさしぶり」

そして、続けた。

「どうしたの？ あたしの顔に何かついてる？」

「どういうことだ、これは。おれは呆然と中島の目を見つめた。

「わからない？」

わからない。いや、わかりたくない。中島の目には、いまや何も映っていないかった。真正面からその目を覗き込んでいるおれの顔も、



その後ろの窓枠も、窓の外の街灯とそれに照らされた雪も。ただのつペリとした灰色が中島の両目を覆っているだけだった。

「もう頭まで雪に埋まつちゃった」

中島の声がひどく遠く聞こえる。おれは机の上を見た。中島はレポートを作っているところだったようだ。レポート用紙には見覚えのある中島の字が何行も書かれている。中島はおれの考えを読んで、聞かれる前に答えた。

「雪に埋まつても、ちゃんとものは見えるんだ。ただ……」  
ただ？

「ただ、何を見ても寒い感じだけど」  
それがどんな感じなのか、実のところおれにはよくわからなかった。中島のようにすもべつだんつらそうには見えなかった。だが、このままでいいとは思えない。おれは尋ねた。どうやればおまえを掘り出せる？ 中島は答えない。おれはさらに問うた。春になれば解けるんだらう？

中島は答えない。そうだろう。中島自身そんなことはわからないはずだ。いつのまにか中島の肩を両手でつかんでいたことに気づき、その手を放しておれはとぼとぼと自分の席に戻る。雪に埋まつたはずの中島の体温はちゃんと三十六度ぐらいあつて、それが妙におかしかった。

おれもどうにか二年生になることができ、桜の下で新年度がはじまった。中島も危なげなく進級している。だが、あの夕暮れの図書館以来おれは中島とまったく口をきいていなかった。周囲の連中からは、二人は破局にいたったと思われている。

火曜三コマの英語。教室は去年中島と初めて会ったあの教室だ。おれはいつもの癖で最前列左端の席にいた。中島はこの講義を取っていない。おれの隣の席には知らない男がすわって舟を漕いでいる。窓の外には今年も満開の桜。おれは米国の政治文化について熱弁をふるう講師を完全に無視して、授業時間が終わるまでずっと桜を眺

めていた。

その晩、おれはひさびさに中島の部屋を訪ねた。中島は前に会ったときのままだった。かつてあらゆるものを細部まで映し出していたその両目は、いまでは取りつく島もない灰色の球体になってしまっている。部屋の中の温度までこころなしか低く感じられた。

おれは中島のほうから吹いてくるひんやりした風にふるえながら時機を待った。つとめて普段どおりをよそおいつつ、新年度の講義の感想やら共通の知人のゴシップやらをしゃべる。長く待つ必要はなかった。ほどなく中島はトイレに立ち、携帯電話が後にのこされた。おれはそれに手を伸ばした。

事情がどうあれ感心しない行為だとは承知している。法律のことはわからないが、お天道さまには恥じねばなるまい。だが、ほかに方法が見つからなかった。それに、どのみちいまのままではお天道さまなどないも同然なのだ。中島にとつても、おれにとつても。おれは電話をいじって、アドレス帳を開いた。金子を探す。金子直哉、こいつだ。電話番号を憶える。たった十一桁の丸暗記だ。根性で脳に刻みこめ。刻みこんだ。携帯電話を元に戻す。水音がして、中島がトイレから出てくる。おれは内心おののくが、悪事はどうやらばれずに済んだ。

雪国の人間はみな雪かきのプロである。雪が降るたびに大混乱に陥る東京の人間とは出来が違うのだ。いま、おれは雪かきをする決心をかためていた。雪国の人間としては、むしろ雪かきに取りかかるのが遅すぎて恥ずかしいぐらいだ。

おれは適当な理由をつけて中島の部屋をおいとまし、自分の部屋に飛んで帰った。深呼吸をひとつ、問題の番号に掛ける。いまごろ気がついたが、番号を暗記する必要は全然なかった。自分の携帯電話にメモすればよかったのだ。バカか、おれは。などと頭の中でつぶやくあいだも、電話は延々と呼び出し音を鳴らしつづけた。知らない番号からいきなり掛かってきた電話だ。取るべきか迷ってい

るのかもしれない。おれは辛抱づよく待った。呼び出すこと二十秒あまり、やつとつながった。出たのはもちろん知らない男の声だ。どちらさんですか。もしもし、金子さんですね。私は、ええと、ええとですね。

しどろもどろになりつつおれは自分の立場を説明した。そして中島の様子を。もちろん雪がどうこうというのは省いて、何カ月も元気がなくて塞ぎ込んでいるというふうに話した。相手は黙って聞いていたが、やがて言った。それで俺にどうしろというんです？ おれは答えた。あなたは成人式のときに中島さんに会って、むかし彼女のことを好きだったって言ったそうですね？

答えはツー、ツーという電子音だった。あの野郎、切りやがった。おれは断乎掛けなおした。ここまで来て引き下がれるか。

今度は一分以上もたって、やつはようやく電話に出た。開口一番とげだらけの声で言う。しつこい人だな、あんたも。おれは取り合わずに話を進める。彼女も中学校のころあなたのことが好きだったんだ。それで悩んでるんです。だからどうした。いまから仲良くなれとも言うのか。いいえ。第一そんなことできっこないでしょう。あなたは結婚するんだそうですね。音高く男は舌打ちした。もうした。だから、たしかにそんな真似はできねえよ。だったら、とおれは力をこめて言う。きちんその後始末をしてください。あなたも結婚するまえに自分の昔の気持ちにけりをつけておきたかったから彼女にあんなことを言ったんでしょう。あなたはそれでいいかもしれませんが、彼女はそのせいですっかり混乱しちゃったんです。その責任をとってください。男は言う。どうやってするよ、そんなこと。おれは言う。彼女に電話して、こないだ言ったことは冗談だったと言ってください。

しばしの沈黙。男の背後でテレビが笑い声を上げていた。おれは身をかくして待つ。やがて男は息を吐いた。そんなことでうまくいくのかよ。わかりません。でも、うまくいかなかったとしてもこれっきり御迷惑はかけません。一度だけ無理を聞いていただけませ

んか。男はまた舌打ちした。しょうがねえ、わかった、やってやる。だからうまくいってもいなくても二度と電話掛けて来んな。ありがとうございます、よろしくおねがいます。電話は切れた。

気がつけば汗だった。雪かきは重労働なのだ。それにしてもこんなに疲れる雪かきは初めてだ。ほんとうに、これでうまくいけばいいのだが。

翌日。昼休みの学食でおれは中島をつかまえた。人で埋まった食堂のすみのほうにぽつんとすわって箸を動かしている。連れはないらしい。中島の正面の席が空いているのがまるで何かの罫のように見えた。

おれはありったけの勇気を振るいおこしてそこへ行き、言った。ここ、空いてるか。中島は顔を上げておれを見た。その目は灰色一色のままで、やはり何ひとつ映っていなかった。おれの姿も、目の前の昼食の皿も、ごみごみした食堂の風景も。だが、何か違っていた。

返事をせずに、中島はじっとおれを見つめた。五秒、十秒。やがて、その目の中の灰色の壁がぐらついた。上のほうがぐずぐずと崩れ、光が差した。天井の蛍光灯が映っている。灰色はさらに崩れてゆき、おれの顔も出てきた。とけのこった雪が頭に乘っかっている。われながら間抜けなありさまだが、そのくせずいぶん真剣な顔だ。中島の目の中で雪はどんどんとけていった。中島の前の食べかけの昼食が出てきた。食堂の中を行き交う大勢の学生の姿も出てきた。食堂の窓の外の満開の桜も出てきた。もう雪はひとかけらもない。雪はすっかりとけたのだ。春だ！

空いてるよ、と中島は言っ、ほほえんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7251x/>

---

雪

2011年10月19日08時35分発行